

私のシネマトグラフ

映画の因縁 新野敏也

三歳の時、テレビCMで知った浅草かどこかの菊人形が観たくてジタバタ暴れ、連れて行ってもらったのが二子玉川園という遊園地の「菊人形展」。ところが入口に展示されていた歌舞伎の隈取り人形がコワくて入れずダダこねて、機嫌直しに併設の映画館で観たのが「モスラ対ゴジラ」、これが初の映画鑑賞であった。その後幼稚園の年長組で卒業式も迫る2月21日、東劇（今の東劇の前身）で観た「恐竜100万年」が初の洋画体験となるが、この作品が今の私のライフワーク“喜劇映画研究会”との因縁めいた出逢いになるうとは…。

四歳の時、縁日でもらった沢蟹が、飼っていたバケツから逃げて雨戸の戸袋の中で死んで、凄い腐敗臭に悩まされた記憶が今も鮮明に残っている。1966年3月27日の日曜日、テレビで観た「ウルトラQ」という怪獣番組でガラモンなる怪獣がゲロ吐いて死んだ瞬間、子供心に『こんなにデカイ物が死んで凄いくさいだろうけど、誰がどうやってこの死骸をかたづけるんだ？』と真剣に考えて、行き着いた結果が“映画監督になって真実を知らせたい！”だった。こうして幼児期に怪獣から始まった映画熱は、両親が文化と教養に無縁であった故、私も勉強を放棄していた事から撮影術や編集法を独自に発明しなければならず（蒙昧ぶりは国際レベル）、小学校6年で知ったチャップリンからやや軌道修正され、17歳の時に二歳下の小林という男と出逢った事から決定的に“喜劇の研究”へと変わった。

小林は数年後に下北沢からケラリーノ・サンドロヴィッチなる名前で全国区の有名人へと躍り出たので、しからば私は独自に喜劇研究を纏めてみようとして資料編纂を始めた。ここで特に興味を持った人物がアメリカ映画界の重鎮ハル・ローチ、日本の文献には詳しく触れられていない事から余計にヲタ心を煽られて、ローチと彼の生涯のライバル＝マック・セネット（チャップリンを映画デビューさせた人物）を掘り下げてみた。するとローチは私と同じ誕生日！そして晩年に作った映画が「恐竜100万年」である事がわかった！こうして私の研究は紆余曲折の末に「サイレント・コメディ全史」というタイトルで無謀な自費出版に結実した。まあ、今では古本屋やネット・オークションで4千円以上のプレミア本らしく、いくつかの

大学では教科書に使われているので、コレで本業とは別の信望(?)
が得られたのなら、それなりに価値はあったと自負しているが…。

この本が完成した1ヵ月後の1992年11月2日、ローチ氏は百歳
で大往生された。幼い時に買った「恐竜100万年」のパンフは今も
あるが、主演女優が巨乳で売っていた事は最近知った。

【プロフィール】

あらのとしや●1961年、おすぎ&ピーコ、三島由紀夫と同じ誕生日
の東京生まれ。大手映像制作会社に勤める傍ら、非営利サークル「喜
劇映画研究会」を主宰、古典映画の修復・調査、講演や上映会を行
っている。<http://kigeki-eikenn.com/>